

研究紀要

第35号

—設立40周年記念号—

研究紀要

第35号

—設立40周年記念号—

公益財団法人

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

- | | |
|---|-------------------------|
| 上川名式と花積下層式の交流
—縄文時代前期初頭における文様描出方法の統一化について— | 鈴木 宏和 |
| 中矢下遺跡A区出土石槍の再検討
—縄文時代前期後半の石槍との比較— | 水村 雄功 |
| 縄文石器を対象とした型式設定における一試論
—縄文時代前期の押出型石匙を対象に— | 入江 直毅 |
| 特殊器台弧帯文の施文方法 | 小林 萌絵 |
| 方形周溝墓の研究とキョウダイ原理をめぐって | 福田 聖 |
| 埼玉県新井堀の内遺跡における埋蔵銭 | 上野貞由美 |
| 近世町屋における鍛冶関連遺物の廃棄状況について | 高橋 杜人 |
| 栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について | 水村 雄功 |
| 近世遺跡出土針葉樹材の簡便な保存処理方法について | 井上 真帆
野中 仁 |
| 古代から教室へのメッセージ事業について | 藤田 栄二
田中 広明
堀内 紀明 |

2021

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

巻頭図版

序

上川名式と花積下層式の交流 —縄文時代前期初頭における文様描出方法の統一化について—	鈴木 宏和 (1)
中矢下遺跡A区出土石槍の再検討 —縄文時代前期後半の石槍との比較—	水村 雄功 (21)
縄文石器を対象とした型式設定における一試論 —縄文時代前期の押出型石匙を対象に—	入江 直毅 (35)
特殊器台弧帯文の施文方法	小林 萌絵 (55)
方形周溝墓の研究とキョウダイ原理をめぐって	福田 聖 (65)
埼玉県新井堀の内遺跡における埋蔵銭	上野真由美 (91)
近世町屋における鍛冶関連遺物の廃棄状況について	高橋 杜人 (107)
栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について	水村 雄功 (123)
近世遺跡出土針葉樹材の簡便な保存処理方法について	井上 真帆 野中 仁 (147)
古代から教室へのメッセージ事業について	藤田 栄二 田中 広明 堀内 紀明 (157)

上川名式と花積下層式の交流

—縄文時代前期初頭における文様描出方法の統一化について—

鈴木 宏和

要旨 本稿の目的は、横線文と鋸歯状文の複合現象がなぜ起きるのかを明らかにすることである。

縄文時代前期初頭では、鋸歯状文（口縁部に入り組み状の集合沈線を施して鋸歯モチーフを描く）が、東海地方の木島Ⅷ式、中部地方の中越Ⅰ式、関東地方の花積下層Ⅰ式～Ⅲ式、東北地方の上川名式第Ⅱ段階で隆盛する。

しかしその中でも、二条の横線文を、短沈線の横位刻みを施して作り、その間に鋸歯状文を描く「複合鋸歯状文」が認められるのは、花積下層式と上川名式のみであり、両型式の密な関係性がうかがえる。

本稿ではまず、横線文（横位刻み）の成立過程に焦点を当てることで、どの様な土器群をもとにしてこの文様が形成されたのかを検討した。そして次に、横線文（横位刻み）がどの様な過程で鋸歯状文と関係性を持つようになったのかを検討した。

その結果、前期初頭で広く分布する、隆帯を持つ土器（遠下式・塚田式）が横位刻み手法の成立に大きく関わってくることが分かった。そして、それぞれ在地の手法を用いていた花積下層式と上川名式の製作者が、横線文の描き方を統一化させたことが、横線文（横位刻み）と鋸歯状文の複合に繋がったと結論付けた。

はじめに

本稿の目的は、縄文時代前期初頭に関東から北東北にかけて分布する複合鋸歯状文の成立理由を明らかにすることである。

本稿の主題である「複合鋸歯状文」（第1図）は、以下の条件を満たすものとする。

1. 短沈線の横位刻みを施すことで二条の横線文を形成する
2. 二条の横線文で区画された空間に鋸歯状文を描く。

筆者は以前、複合鋸歯状文の形成過程に触れた（鈴木2020）。しかし、横線文の成立母体について、口縁部に横位隆帯を持つ細紋地紋の土器に關

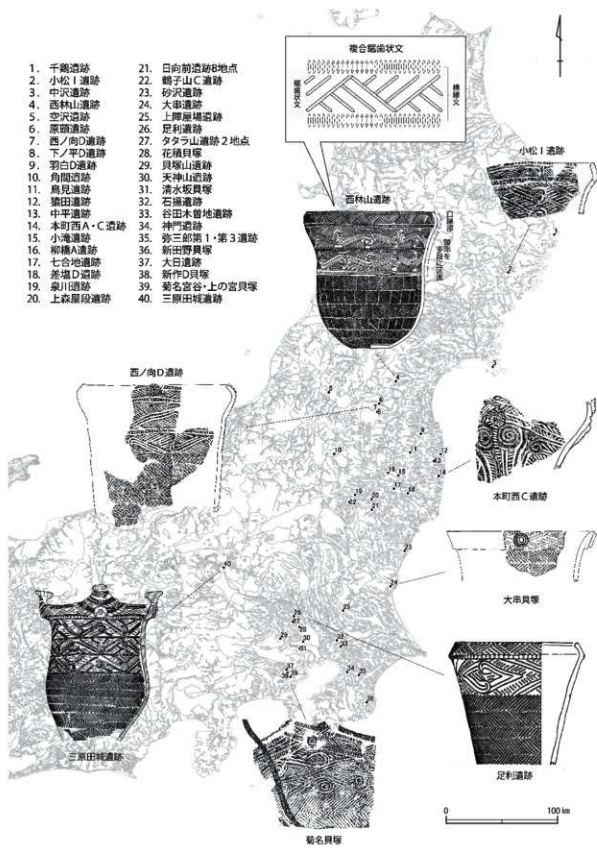
連させて論じられなかった。本稿はいわば、その補論にあたる。

1 先行研究

（1）鋸歯状文

前期初頭で広く分布する鋸歯状文は、以前から研究者に注目されてきた。研究者によってその呼び方は様々だが、ここでは鋸歯状文と総称して研究史を概観する。

なお、鋸歯状文を多用する代表的な土器群である花積下層式・上川名式の研究史は、今回は割愛する。詳しくは他の論稿（谷藤1994・99、渋谷1984、相原1990、早瀬2017、鈴木2019・



- 1. 千鶴遺跡
- 2. 小松I遺跡
- 3. 中沢遺跡
- 4. 西林山遺跡
- 5. 空沢遺跡
- 6. 原野遺跡
- 7. 西ノ向D遺跡
- 8. 下ノ平D遺跡
- 9. 羽白D遺跡
- 10. 角間遺跡
- 11. 鳥見遺跡
- 12. 猿田遺跡
- 13. 中平遺跡
- 14. 本町西A・C遺跡
- 15. 小滝遺跡
- 16. 柳橋A遺跡
- 17. 七合地遺跡
- 18. 差場D遺跡
- 19. 泉川遺跡
- 20. 上森屋段遺跡
- 21. 日向前遺跡B地点
- 22. 鶴子山C遺跡
- 23. 砂沢遺跡
- 24. 大車遺跡
- 25. 上柳屋場遺跡
- 26. 足利遺跡
- 27. タタラ山遺跡2地点
- 28. 花積貝塚
- 29. 貝塚山遺跡
- 30. 天神山遺跡
- 31. 清水坂貝塚
- 32. 石橋遺跡
- 33. 谷田木曾地遺跡
- 34. 神門遺跡
- 35. 弥三郎第1・第3遺跡
- 36. 新田野貝塚
- 37. 大日遺跡
- 38. 新作D貝塚
- 39. 菊名宮谷・上の宮貝塚
- 40. 三原田城遺跡

第1図 複合鋸歯状文の分布

2020)を参照していただきたい。

澁谷昌彦氏は、鋸歯状文に注目して花積下層式と木鳥式の関係性を論じた(澁谷1982・84)。澁谷氏は、東海地方の木鳥Ⅲ式と、関東地方の花積下層Ⅲ式のあいだで、鋸歯状文が共有されていることを指摘し、これを異系統の土器同士が相互に影響した例として挙げている。

松本茂氏は、南東北域での鋸歯状文の系統性を示した(松本1993)。松本氏はその祖形を、鶴ヶ島台式の刺突充填文様に求めている。さらに茅山下層式以降もこの種の文様が継続し、福島県内では、前期初頭まで鋸歯状文が残るとした。

東北地方で鋸歯状文が早期末から前期初頭まで継続したとする研究は、他に中村五郎氏(1983)や山内幹夫氏(山内1983)の例がある。

中村五郎氏は、前期初頭を「花積下層式」(上川名式)とする従来の編年を改め、「花積下層式」より古く大畑G式を位置づけた(中村1983)。そして、大畑G式が前期のきわめて古い部分に編年されるとした。

また、大畑G式と「花積下層式」(上川名式)の中間段階に位置する土器群として、福島県日向前B遺跡・泉川遺跡出土資料を提示し、「日向前B期」と呼んでいる(中村1983)。「日向前B期」に当たる土器群の特徴として、沈線手法で口縁部に「横線文」・「鋸歯文」・「複合鋸歯文」(ここでは「鋸歯文」を二段重ねる文様を指す)・「連弧文」を描くことを挙げている。

また中村五郎氏は、「日向前B期」の「複合鋸歯文」が幅を狭くして「花積下層式」の口縁部文様に引き継がれることを指摘している。

筆者は、上川名式第1段階(相原1990)の土器群(第1表)に鋸歯状文が施される例はなく、上川名式第2段階で初めて鋸歯状文が施されることを指摘した(鈴木2020)。そして、「日向前B期」から上川名式期へと鋸歯状文の系統を接続させるためには、東北地方で「日向前B期」

にあたる土器群が、上川名式第2段階の直前まで存在している必要があるが、その様な資料は確認できないとした。

さらに筆者は、鋸歯状文が関東地方の花積下層式で最古段階から存在することを指摘した。そして上川名式の鋸歯状文は、花積下層式からその系譜を引いてきた方が平滑に説明できるとした。

(2) 複合鋸歯状文

筆者以外で複合鋸歯状文という呼称は用いられていないが、ここではそれに相当する文様の研究史に触れる。

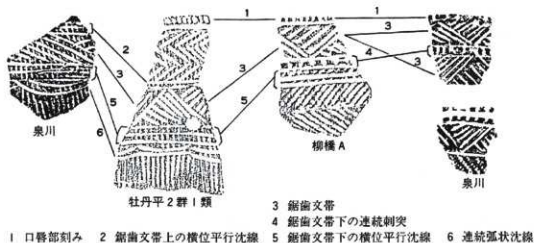
山内幹夫氏は、福島県牡丹平遺跡の報告を書くなかで、「牡丹平2群I類」(第2図)と呼んだ土器群を、一括性の高い資料と見なした(山内1983)。「牡丹平2群I類土器」(第2図)の特徴として、地紋で施される細紋が縦走することを挙げ、さらに細い半截竹管状工具の背で沈線(凸沈線)を引いて「鋸歯文」・「矢羽根状文」・「連弧文」を描出するとしている(第2図3・6)。

そして山内氏は、「牡丹平2群I類土器」の口唇部の連続刺突(第2図1)と、口縁部の「鋸歯文」(第2図3)に着目し、「日向前B期」から上川名式までの変遷を捉えた。

山内氏は変遷案の中で、口唇部の連続刺突(スリット)を、先行する大畑G式からの要素とし、「日向前B期」の後続である福島県泉川遺跡、柳橋A遺跡の上川名式にも連続刺突が受け継がれることを指摘した(第2図1)。

また、「鋸歯文」は、日向前B遺跡の土器にみられる入組平行沈線文から成立し、「牡丹平2群I類土器」を経て、柳橋A遺跡の土器へと継承されるとした(第2図)。

山内氏は最終的に、「日向前B期」から「牡丹平2群I類土器」までの系列に当たる土器群を「日向前B式」と呼んだ。そして「日向前B式」を、縄文時代早期末葉の大畑G式(中村氏と年代観が異なる)以降、そして前期初頭の上川名式以前



第2図 鋸歯文が施される土器の系統 (山内 1983)

第1表 燃糸側面圧痕紋土器の編年 (鈴木 2020)

	谷藤(1994)	鈴鹿(1989)	相原(1990)・早瀬(2017)	鈴木(2020)
I期	花積下層I式	羽白DII群0類	上川名式第1段階	上川名式第1-a段階
II期	花積下層II式	花積下層式(古)		上川名式第1-b段階
III期	花積下層III式	花積下層式(新)	上川名式第2段階	上川名式第2段階

施文 時期	転がす	押圧する	押圧する	押圧する	刺し切る	刺し切る
南東北地方(上川名式)	I (A群)	(B群1種)				
	×	(B群2種)	(C群1種)	(C群)	(D群1種)	(D群2種)
	III	×	×	(C群)	(D群1種)	(D群2種)
施文 時期	転がす	押圧する	押圧する	押圧する	刺し切る	刺し切る
関東地方(花積下層式)	I (A群)					
	×				(D群1種)	(D群2種)
	III				(D群1種)	(D群2種)

第3図 上川名式と花積下層式における横線文の施文方法の比較 (鈴木 2020)

に位置づけた。

(3) 横線文(横位刻み)

山内氏は、口唇部の連続刺突(スリット)の推移によって上川名式の横位刻み手法の成立を説明した。

しかし一方で、全く別の系列から上川名式の横線文(横位刻み)の成立を捉える研究がある。

上川名式の最古段階は、口縁部に貼付け隆帯を施し、その上を縄紋原体で装飾するものが大半で、口唇部にスリットを施すものは数として多くない。この口縁部に貼付け隆帯を施す土器群に注目したのが、鈴鹿良一氏である(鈴鹿 1988・89)。

鈴鹿良一氏は、福島県羽白D遺跡の報告(鈴鹿 1988)の中で、前期初頭の燃糸側面瓦痕紋土器で最も古い様相を示す資料として「羽白D遺跡Ⅱ群0類土器」を提唱した。鈴鹿氏は、この土器群の特徴として以下の三つの技法を挙げる。

- ①口縁部文様帯を横位の貼付け隆帯で区画する。
- ②隆帯上または口唇部に回転縄紋を施す。
- ③口縁部または口唇部に燃糸紋を押圧する。

そして鈴鹿氏は第4回縄文文化検討会シンポジウムで、「Ⅱ群0類土器」の変遷観をより詳細に検討した(鈴鹿ほか 1989)。鈴鹿氏は福島県の前期初頭編年として「前期初頭の土器群」・「花積下層式(古)」・「花積下層式(新)」の三段階を提示している。「前期初頭の土器群」は「羽白D遺跡Ⅱ群0類」と同じ土器群である(第1表)。

また、口縁部装飾に関する施文手法として、①回転縄紋・燃糸紋⇒②短軸の縄紋原体瓦痕⇒③横位刻みという三段階の変遷観を唱えた。

この変遷観を踏まえて筆者は、鈴鹿氏が想定する①回転縄紋・燃糸紋⇒②短軸原体瓦痕⇒③横位刻みという三段階の変遷観が、横線文(横位刻み)の成立過程を最も円滑に説明できるとした(鈴木 2020)。

また筆者は、「羽白D遺跡Ⅱ群0類」を基軸と

した南東北での横線文の展開と、花積下層Ⅰ式を基軸とした関東での横線文の展開を比較し、両地域の系統差を抽出した(第3図)。

そして、上川名式第1段階を、「羽白D遺跡Ⅱ群0類」に該当する部分(第1-a段階)と残りの部分(第1-b段階)とに細分し、上川名式第1-a段階を花積下層Ⅰ式、上川名式第1-b段階を花積下層Ⅱ式に併行させた(第1表)。

2 複合鋸歯状文の定義

先行研究を踏まえた上で、第1図に示した「複合鋸歯状文」の定義を示す。

入り組み状の集合沈線を口縁部に施す手法は、早期後葉の鶏ヶ島台式・茅山下層式、あるいは早期末葉の日向前B式にも確認できる。しかし、早期から前期初頭までこの手法が連続と続いている訳ではないため、本稿で示す鋸歯状文は、花積下層Ⅰ式から系譜を辿れる文様に限定する。

そして本稿の主題である「複合鋸歯状文」は、以下の条件を満たすものとする。

- ①短沈線の横位刻みを施すことで二条の横線文を形成する。
- ②二条の横線文で区画された空間に鋸歯状文を描く。(口縁部に一条の横線文(横位刻み)しか持たないものは、「複合鋸歯状文」としては扱わない。)

3 複合鋸歯状文の分布

複合鋸歯状文を出土する遺跡の分布を示したものが第1図であり、現段階で40遺跡を数える。

そして、西林山遺跡・西ノ向D遺跡・三原田城遺跡・菊名貝塚の例を見ると、頸部を数段に区画して、その中に燃糸側面瓦痕で描いた蕨手文を菱形に配列している。これらの手法は、花積下層Ⅲ式ー上川名式第2段階に限られるもので、時期決定の指標となる。

第1図で示した複合鋸歯状文を持つ土器は例

外なく花積下層Ⅲ式—上川名式第2段階であり、前段階の花積下層Ⅰ・Ⅱ式、または次段階の二ツ木式新田野段階は含まれていない。このように、横線文（横位刻み）と鋸歯状文の複合現象は非常に限られた時期に起こったものと分かる。

鋸歯状文単体は、関東域では花積下層Ⅰ式—二ツ木式新田野段階まで継続して認められるが、東北域では上川名式第2段階で確認できるのみである。

上川名式では第1-b段階から第3段階まで、横線文（横位刻み）が継続して認められることから、上川名式第2段階で、花積下層式の鋸歯状文が流入してきたと考えれば、横線文と鋸歯状文が複合する過程については説明できる。

しかし、これだけでは2つの文様が複合する理由までは説明できていない。なぜなら、長い間別々の系統として存在していた横線文と鋸歯状文が、なぜこの時期に複合するようになるのか言及していないからだ。

つまり、複合鋸歯状文が成立する理由を説明するには、それ以前でなぜ横線文と鋸歯状文の複合現象が起き得なかったのかを明らかにしなければならない。

横線文の要素は、花積下層式と上川名式それぞれで、最古段階から存在しているため、複合鋸歯状文が成立する下地は既に整っていたといえる。それでは、なぜ花積下層Ⅲ式—上川名式第2段階にならないと成立しないのか。そして、成立するためには何が必要だったのか。この二つの疑問を解決するためには、上川名式・花積下層式それぞれの文化圏での、横線文の生成・変遷過程を追う必要がある。

4 上川名式第1-a段階における横位隆帯

上川名式における横線文の系譜は、縄紋を施した横位隆帯にまで遡るが、この横位隆帯の母体となった土器群は何であろうか。大畑G式や日向前

B式に隆帯は一切伴わず、そこから系譜を引いてくることは難しい。

そこで注目されるのが、縄文前期初頭に広域的に分布する、横位隆帯を口縁部に持つ縄紋地紋の土器群である。これらは、中部～関東域では塚田式、茨城県～福島県域では遠下式として捉えられてきた土器群である。これら土器群の形成過程を追うことで、上川名式における横位隆帯の成立を捉えることが可能になる。

5 上川名式第1-a段階と遠下式との関係性

上川名式における横線文の成立に、遠下式と呼ばれる土器群が関係してくる可能性を前章で述べた。本章では遠下式の先行研究に触れながら、上川名式第1-a段階と遠下式との関係性について整理する。

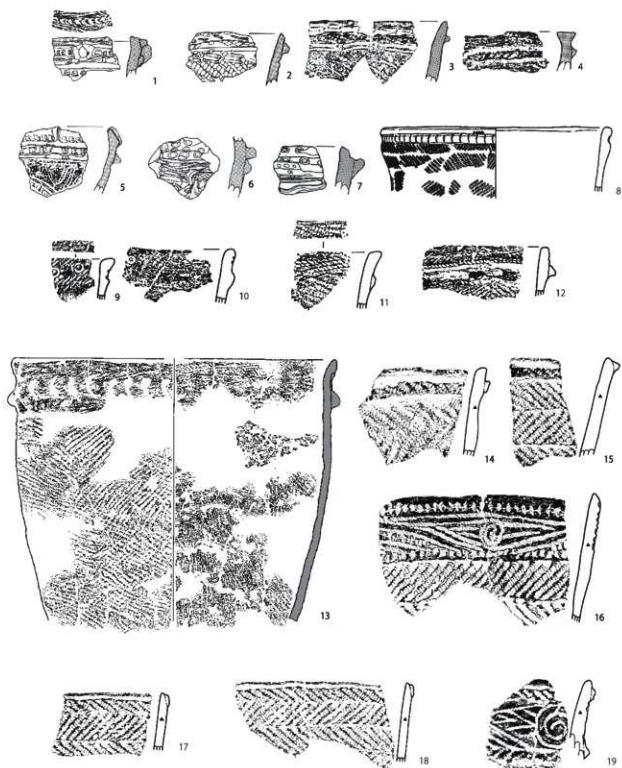
(1) 遠下遺跡第5群土器の研究史

遠下式は1990年に、川崎純徳氏が『那珂町の考古学』のなかで提唱した型式（川崎1990）で、茨城県日立市の遠下遺跡第5群土器（石岡1975）（第4図8～12）を標式資料とする土器群である。川崎氏による型式内容（川崎1990）は次の通りである。

- ・口縁部には隆帯が引付けられ、幅の狭い口縁部文様帯を形成する（第4図8～12）。
- ・口縁部文様帯には燃糸側面圧痕（第4図11・12）や、半截竹管による刺突（第4図8）が施される。
- ・胴部には、地紋として無節あるいは単節の縄紋が施文され、羽状を構成する（第4図13）。

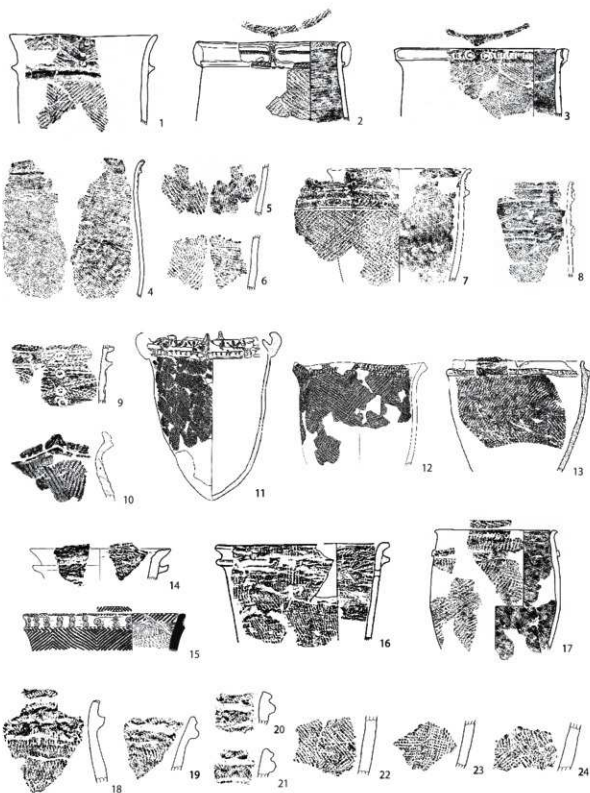
以上が遠下式の概要である。しかし遠下式が設定された当初は、遠下遺跡第5群土器の時期を確定できる資料に乏しく、福島県いわき市竹之内遺跡の資料（第5図14・15）などの類似例が僅かに認められるに過ぎなかった。

1990年代後半以降は、遠下式に相当する資料が増加し、遠下遺跡第5群土器に比類される



1～7：茨城県老杯清水西遺跡　8～12：茨城県遠下遺跡　13：茨城県瑞龍古墳群
 14～16：福島県萩平遺跡（3次）61号住居跡　17～19：福島県萩平遺跡（3次）57号住居跡

第4図 前期初頭の隆帯を持つ縄文地紋土器（1）



福島県空釜B遺跡 (1～6:2号竪穴住居跡 17:2号遺物包含層) 7～9:福島県上田郷VI遺跡 (1次) 13:茨城県冬木新田遺跡
 11:茨城県奥谷遺跡 12:千葉県東峰御幸指西遺跡1号土壌 13:茨城県田島遺跡 14～15:福島県竹之内遺跡
 16:福島県羽白C遺跡74号住居 18～24 (同一個体):福島県青宮西遺跡9号住居跡

第5図 前期初頭の隆帯を持つ縄文地紋土器(2)

土器群の位置づけが可能になった。1999年・2001年には、福島県広野町にある上田郷VI遺跡の報告書が刊行された。上田郷VI遺跡では、遠下遺跡第5群土器に当たる資料が福島県域でも多量に出土することが分かった。

2008年には、福島県平田町にある空釜B遺跡の報告書が刊行された。2号住居では、上川名式第1-a段階(第5図1)と遠下遺跡第5群土器(第5図2・3)の共伴が確認された。青山博樹氏は報文の中で、2号住居の土器を基準に、「空釜B遺跡Ⅱ群2類」(第5図1～4)を前期初頭に位置づけた(青山2008)。

さらに青山氏は、「空釜B遺跡Ⅱ群2類」(縄体圧痕・竹管刺突系)の形態が「羽白D遺跡Ⅱ群0類」と「上田郷VI遺跡ⅡB群3類・4類」に類似することを指摘した(青山2008)。この検討によって、上川名式第1-a段階と遠下遺跡第5群土器を同じ時間軸で扱うことが可能になった。

(2) 遠下遺跡第5群土器とその前後

それでは、遠下遺跡第5群土器の前身と後身にはどのような土器群が想定できるのか。先行研究では、遠下式の成立母体については明確に述べられていないが、羽白C遺跡74号住居例(第5図16)がそれに当たると推測できる。

これと同タイプのものは、空釜B遺跡(第5図17)や冑宮西遺跡(第5図18～24)でも出土している。このタイプの土器群は以下の特徴を持つ。

1. 器面の外面に縦あるいは斜め方向の回転縞系紋を施し(第5図18～24)、口縁部の上面にも口縁に沿うように回転縞系紋を施す(第5図16・17)。
2. 口縁部に大きな凸帯を施す(第5図16・17)。

冑宮西遺跡(3次)9号住居例(第5図18～24)や羽白C遺跡74号住居例(第5図16)の

口縁部隆帯と、竹之内遺跡例(第5図14)と空釜B遺跡例(第5図2)とを比較すると、口縁部隆帯の貼付け方がよく似ていることが分かる。羽白C遺跡74号住居例は、回転縞系紋を口縁部～胴部下に施すなど、遠下遺跡第5群土器との地紋の違いが見受けられるが、系統的に近接することは間違いないであろう。

遠下遺跡第5群土器と羽白C遺跡74号住居例との、明確な共伴や、層位的な出土は確認できていない。だが回転縞系紋を地紋とする土器が、上川名式第1-b段階の資料に共伴することはない(羽白C遺跡74号住居例が遠下遺跡5群土器より時期的に新しくなることはない)ため、とりえず遠下遺跡5群土器よりも古相に位置づけたい。

それでは、遠下遺跡5群土器の要素は上川名式1-b段階ではどのような形で確認できるだろうか。

上川名式1-b段階の良好な一括資料である萩平遺跡(3次)61号住居(第4図14～16)と、57号住居(第4図17～19)を見てみよう。縞系側面圧痕で蕨手文を描く土器(第4図16・19)には、回転縞系紋を施した隆帯は付かない。一方で、蕨手文がなく回転縞系紋のみの土器には、回転縞系紋を施す鐮状の隆帯が確認でき(第4図14・15・17・18)、遠下遺跡第5群土器と類似していることが分かる。

一方で、遠下遺跡第5群土器を構成する主要な要素であった竹管工具は、上川名式第1-b段階では確認できなくなる。萩平遺跡の資料(第4図14・15・17・18)を遠下遺跡第5群土器の最終段階と見なすことも出来るが、ここでは竹管工具が認められる上川名式第1-a段階をもって遠下遺跡第5群土器の下限としたい。

(3) 遠下式の再設定と横線文の系譜

前節までの検討で、遠下遺跡第5群土器の存続期間が定まった。その結果、遠下式が前期初頭

の土器型式として十分に機能することが確認できた。遠下式は、上川名式第1-a段階に併行する土器群であり、上川名式第1-a段階との折衷土器が認められる(第5図8・9)ことから両型式の密な関係性が伺える。

遠下式の横線文は、羽白C遺跡74号住居例から系統的に続くものと推測される。そして遠下式との影響関係の中で上川名式第1-a段階の横線文が形成されたと考えることが出来る。

その後、上川名式第1-b段階では、回転襷糸紋は消失する。また遠下式も、竹管による施文手法が衰退し、貼付け隆帯と胴部下の羽状縄紋のみが残ることで、最終的には上川名式との区別が明瞭でなくなる。

早期から継続する横線文は、上川名式第1-a段階までは、口縁部の貼付け隆帯上に縄紋原体を押捺・押圧することで形成された。一方で上川名式第1-b段階では、隆帯上を縄紋原体で押圧するもの(第4図19)が残存する一方で、隆帯を伴わず口縁部に直に縄紋原体を押圧するもの(第4図16)が出現する。

さらに上川名式第2段階では、横線文の要素から隆帯・縄紋原体がともに払拭され、短沈線による横位刻みを直に施す手法が主流となる(第3図)。

6 花積下層Ⅰ式段階における横位隆帯

(1) 花積下層Ⅰ式と塚田式の関係性

上川名式第1-a段階における横位隆帯の成立に、遠下式土器が大きく関わっていることを前章で確認した。それでは花積下層Ⅰ式はどうだろうか。

花積下層Ⅰ式では基本的に、横位隆帯は用いられないが、中部・北関東に分布する塚田式(下平・賛田1994)との折衷土器でならば、横位隆帯による横線文を確認できる(第7図 鍛寺屋遺跡出土・塚田遺跡出土)。

塚田式では、隆帯上に回転縄紋を施す手法(第

6図3)、隆帯上を棒状・ヘラ状工具で刺し切る手法(第6図2)が認められる。

塚田式の指標となる口縁部の隆帯は、早期末(石山式～天神山式期)に中部地方で在地的に分布する「絡条体圧痕文土器群」を母体に成立すると考えられており(谷藤1999・2006・賛田2008)、遠下遺跡第5群土器(第4図8～12)とは系統を異にする。

(2) 南東北の横線文との系統的差異

南東北の横線文と異なり、花積下層Ⅰ式-塚田式の分布圏では、はじめから横線文(横位刻み)が存在し、縄紋原体による押圧はほとんど認められない。なぜなら、早期最終末に中部地方に分布する「絡条体圧痕文土器群」では、絡条体による押圧が、横線文を描出する手法の主体であったが、次段階の塚田式で、棒状・ヘラ状工具による刻み手法へと切り替わっているからである。

そのため花積下層Ⅰ式-塚田式の分布圏の横線文は、羽白C遺跡74号住居例から連続的に変化する南東北の横線文とは一線を画する。

花積下層Ⅰ式-塚田式以後は、貼付け隆帯の上に回転縄紋を施す手法は認められなくなる。塚田式の次段階の型式にあたる中道式では、回転縄紋が口縁部の装飾手法として引き続き用いられるが、口縁部の隆帯は、肥厚口縁へと形態変化する。

一方で花積下層Ⅱ式では、隆帯を貼付ける手法は残り、隆帯上の装飾は、棒状・ヘラ状工具による刺し切り手法に統一される。

花積下層Ⅰ式-塚田式分布圏では、それ以後も一貫して、横線文の施文手法に押圧動作が認められないことから、上川名式-遠下式分布圏との系統差を読み取ることが出来る(第3図)。

7 花積下層-塚田-遠下-上川名の関係性

花積下層Ⅰ式と塚田式は折衷土器の存在によって併行関係が確認できるが、上川名式第1-a段階-遠下式との併行関係はどうだろうか。

冬木新田遺跡と東峰御幸畑西遺跡を見てみよう(第5図10・12)。花積下層1式の指標である「異方向縄文(鋭角羽状縄文)」(谷藤 1999)を胴部に施し、遠下式の特徴である二条の隆起部のあいだに燃糸側面圧痕を施す手法を用いた土器が出土している。

そして奥谷遺跡(第5図11)では、胴部に「異方向縄文(鋭角羽状縄文)」を施し、口縁部に遠下式の特徴である半裁竹管での刺突を施す土器が出土している。これらは花積下層1式と遠下式の折衷土器であり、両型式の併存を示す資料といえる。

また、塚田式のなかにも口縁部に円形刺突を巡らせる土器(第6図2・3)が認められ、これらは遠下式の影響を受けたものと考えられる。

よって、花積下層1式-塚田式-遠下式-上川名式第1-a段階は併行関係にあるといえる。

8 前期初頃の土器群

四型式(花積下層1式-塚田式-遠下式-上川名式第1-a段階)の内容と、型式間の関係性を整理したものが第6図である。

花積下層1式は、口縁部に燃糸側面圧痕が半円王され、胴部下では「異方向縄文(鋭角羽状縄文)」が施文されることが特徴である(第6図1)。基本的に横位隆帯は用いられないが、塚田式との折衷土器でならば、横線文(横位隆帯)を確認できる。

塚田式は、隆帯上に回転縄紋あるいは棒状・ヘラ状工具での刺し切りが施される(第6図2・3)。また、少数ではあるが円形刺突が巡るものが認められ、遠下式からの影響が伺える(第6図2・3)。

遠下式は、隆帯上に回転縄紋を施す手法を塚田式と共有する(第6図4・7)が、棒状・ヘラ状工具での刺し切りは認められない。遠下式の最大の特徴として、口縁部に二条の隆起部を作り、その間を竹管工具、あるいは直線状の燃糸側面圧痕で装飾する手法が挙げられる(第6図4～7)。

上川名式第1-a段階は、二条の隆起部のあいだに燃糸側面圧痕を施す構成を、遠下式と共有する(第6図7・8)。だが燃糸側面圧痕により描かれるモチーフが、波状・X字状・山形状・蕨手状を呈するため必然的に、直線状の燃糸側面圧痕(2～3条)で装飾する遠下式(第4図11・12)(第6図7)よりも口縁部文様帯の幅が広くとられていることが特徴である(第5図1・8・9)(第6図8・9)。また上川名式第1-a段階では、直線状の燃糸側面圧痕紋と円形竹管を組み合わせて、蕨手文を模すものが認められる(第5図1・9、第6図9)。

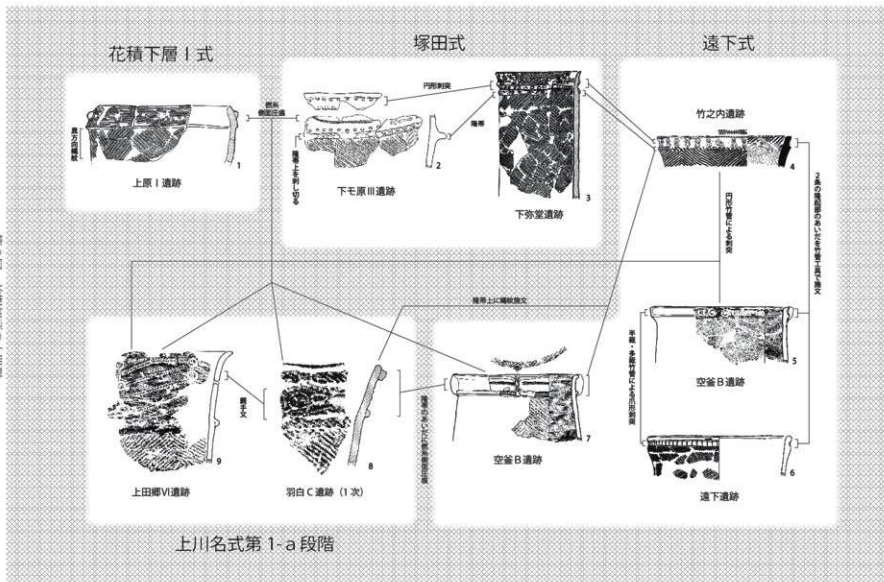
9 隆帯を持つ縄紋地紋土器の分布

前章で検討した型式内容に基づいて、隆帯を持つ縄紋地紋の土器(塚田式-遠下式-上川名式第1-a段階)の分布状況を示したものが第7図である。

第7図を見ると、塚田式と遠下式の分布域は、中部・関東と南東北とで明確に分かれていることが確認できる。

また、北経塚遺跡より以北で、遠下式および上川名式第1-a段階の土器は確認できない。さらに、遠下式は茨城県以西では出土しないが、この分布限界は同様に上川名式第1-a段階にも当てはまる。このように遠下式と上川名式第1-a段階の分布域は重複している。このことから、遠下式と塚田式の空間偏差がそのまま上川名式第1-a段階と花積下層1式の空間偏差とも一致することが分かる。

塚田式-花積下層1式と、遠下式-上川名式第1-a段階の分布域は、中部・関東と南東北とで大きく二つに分かれている。しかし茨城県域では、塚田式・花積下層1式・遠下式・上川名式第1-a段階のどれにも分類し難い土器が散見される(第5図10～13)(第7図)。この現象は、花積下層1式-塚田式の分布圏と、遠下式-上川



名式第1-a段階の分布圏と茨城県域で接触していることを示している。

茨城県域が、花積下層Ⅲ式と上川名式第2段階との緩衝地帯になることを以前述べた(鈴木2019)が、両型式は最古段階からその関係性を維持していたことが伺える。

10 小結：横線文（横位刻み）の成立過程

次章で複合鋸歯状文の成立理由の考察に入る前に、横線文（横位刻み）の生成・変遷過程についてまとめておく。

前章までの検討によって、中部・関東域と茨城・福島県域では、横線文の展開に明瞭な違いが認められることが分かった。そして、この違いは、各地域で早期末に存在した在地の土器群の系統差を反映しているという結論に至った。

遠下式・上川名式第1-a段階の横線文は、羽白C遺跡74号住居例(第5図16)から系統的に続くものと推測される。

一方で塚田式・花積下層Ⅰ式の横線文は、早期最終末に中部地方に分布する「絡条体瓦痕紋土器群」の系統を引くものと推測される。

これら両地域の系統差が、横線文の展開の違いに直結する。

南東北で早期から継続する横線文は、上川名式第1-a段階までは、口縁部の貼付け隆帯上に縄紋原体を押捺・押圧することで形成された。

一方で上川名式第1-b段階では、隆帯上に縄紋原体で押圧するもの(第4図19)が残存しつつも、隆帯を伴わず口縁部に直接縄紋原体を押圧するもの(第4図16)が出現する。

さらに上川名式第2段階では、横線文の要素から隆帯・縄紋原体がともに払拭され、短沈線による横位刻みを直接施す手法が主流になる(第3図)。

南東北の横線文と異なり、花積下層Ⅰ式-塚田式の分布圏では、当初から横線文（横位刻み）が

存在し、縄紋原体による押圧がほとんど認められない。なぜなら、早期最終末で中部地方に分布する「絡条体瓦痕紋土器群」では絡条体での押圧が横線文を描出する手法の主体であったが、次段階の塚田式では、棒状・ヘラ状工具での刻み手法へと切り替わっているからである。この点で、縄紋原体による押捺・押圧の動作が極めて強くなる茨城・福島県域との系統差が浮き彫りになる(第3図)。

花積下層Ⅰ式-塚田式以降の中部・北関東域では、貼付け隆帯の上に回転縄紋を施す手法は認められなくなる。塚田式の次段階に当たる中道式では、口縁部の隆帯が肥厚口縁へと形態変化する。

一方で花積下層Ⅱ式では隆帯を貼付ける手法は残り、隆帯上の装飾は、棒状・ヘラ状工具による刺し切り手法に統一される。

このように上川名式と花積下層式は、紆余曲折を経ながらも、最後には横線文（横位刻み）へと手法が統一されることが分かる。

11 複合鋸歯状文の成立理由

最後にこれまで検討してきた横線文の生成・変遷過程を踏まえて、複合鋸歯状文の成立理由を考察する。なお、これ以降は便宜的に、「上川名式第1-a段階-花積下層Ⅰ式」を「Ⅰ期」、「上川名式第1-b段階-花積下層Ⅱ式」を「Ⅱ期」、「上川名式第2段階-花積下層Ⅲ式」を「Ⅲ期」と呼称する。

横線文（縄紋原体の押捺・押圧）⇒横線文（横位刻み）への流れは前章までで確認した。よって本章では、横線文（横位刻み）がどのような過程で鋸歯状文と関係性を持つようになったのかを検討する。

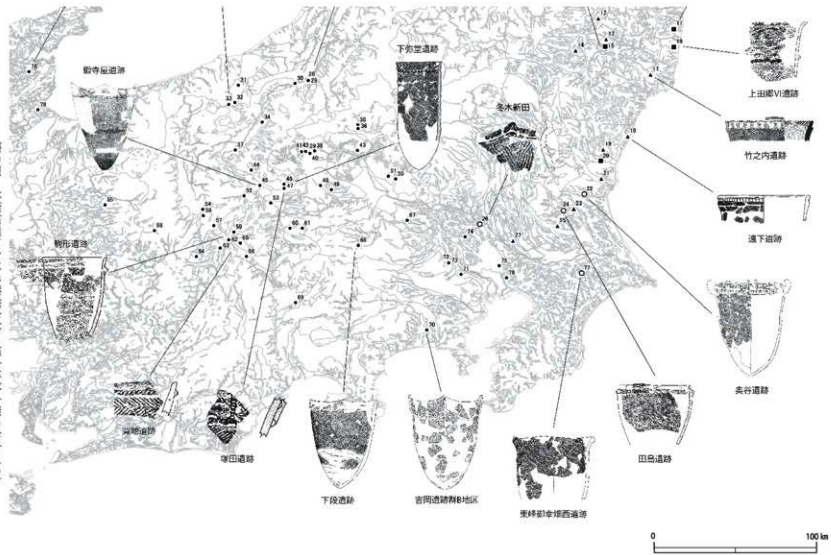
鋸歯状文単体は、花積下層Ⅰ式から継続的に口縁部文様として用いられているが、複合鋸歯状文はⅢ期まで出現しない。それではなぜⅢ期以前には出現しないのだろうか。この問いに対して重要な切り口となるのが「文様描出方法の統一化」で

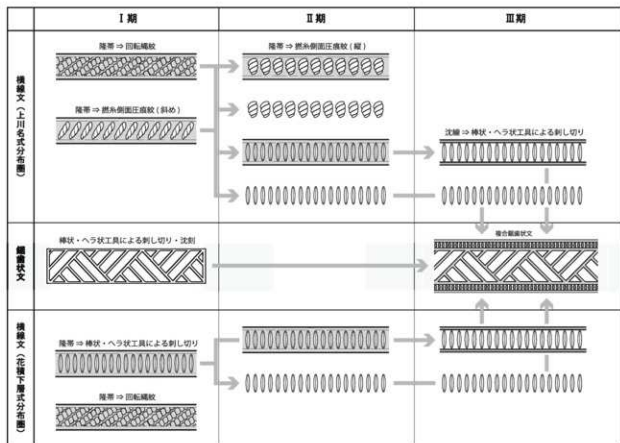
- | | | |
|-------------------|-----------------|---------------|
| 1. 北郷塚遺跡 | 27. 奥山C遺跡 | 53. 榛名平遺跡 |
| 2. 西ノ向D遺跡 | 28. 寺田上A遺跡 | 54. 坪ノ内遺跡 |
| 3. 萩平遺跡(2-3次) | 29. 下モ原山遺跡 | 55. 西田遺跡 |
| 4. 雲岩原遺跡 | 30. ひんご遺跡 | 56. 矢口遺跡 |
| 5. 羽白D-E遺跡 | 31. 八斗舞塚遺跡 | 57. 梨久保遺跡 |
| 6. 松ヶ平A・B遺跡 | 32. 関川谷内遺跡 | 58. 位沢遺跡 |
| 7. 仲山B遺跡 | 33. 大堰遺跡 | 59. 駒形遺跡 |
| 8. 赤柴遺跡 | 34. 田草川尻遺跡 | 60. 坂上遺跡 |
| 9. 原B遺跡 | 35. 洲尻遺跡 | 61. 木次原遺跡 |
| 10. 中平遺跡 | 36. 前中遺跡 | 62. 天狗山遺跡 |
| 11. 本町西A遺跡 | 37. 村東山手遺跡 | 63. 芥沢遺跡 |
| 12. 越田和遺跡 | 38. 三平山遺跡 | 64. 北高根A遺跡 |
| 13. 大杉木遺跡 | 39. 林中原1遺跡 | 65. 真地遺跡 |
| 14. 小又遺跡 | 40. 上原1遺跡(1・2次) | 66. 坂平遺跡 |
| 15. 空釜B遺跡 | 41. 坪井遺跡 | 67. 舟山遺跡 |
| 16. 上田郷VI遺跡(1・2次) | 42. 原家以岩陰遺跡 | 68. 下段遺跡 |
| 17. 竹之内遺跡 | 43. 八木沢清水遺跡 | 69. 立石遺跡 |
| 18. 遠下遺跡 | 44. 四日市遺跡 | 70. 吉岡遺跡群B区 |
| 19. 瑞龍古墳群 | 45. 殿寺塚遺跡 | 71. 成増一丁目遺跡 |
| 20. 森戸遺跡 | 46. 川原田遺跡 | 72. 打越遺跡 |
| 21. 武田石高遺跡 | 47. 塚田遺跡 | 73. 打越遺跡 |
| 22. 奥谷遺跡 | 48. 横川大林遺跡 | 74. タタラ山遺跡2地点 |
| 23. 殿島遺跡 | 49. 新堀東源ヶ原遺跡 | 75. 黒沢川右岸遺跡 |
| 24. 田所遺跡 | 50. 今井切塚遺跡 | 76. 霧下遺跡 |
| 25. 香杉清水西遺跡 | 51. 上大塚・盛福地区遺跡 | 77. 舞峰寺跡西遺跡 |
| 26. 冬木新田遺跡 | 52. 六反田遺跡 | 78. 三引遺跡C-D遺跡 |
| | | 79. 上久津田中屋遺跡 |



第7図 前期初頭における隆帯を持つ縄文時代土器の分布(1)

第7図 前期初頭における隆帯を持つ縄文地紋土器の分布(2)





第8図 複合鋸歯状文の成立過程

ある。

複合鋸歯状文の成立過程を概念的に示したものが第8図である。以後、この図を使って鋸歯状文と横線文の「文様描出方法の統一化」を説明する。

III期では貼付け隆帯の要素が認められなくなると前章で述べたが、実はポジ⇒ネガの反転によって、貼付け隆帯が担っていた機能が別のかたちで保持されている。II期まで認められていた貼付け隆帯の要素は、III期には細隆起線になって一部で残るが、ほとんどは二条の横位沈線に置き換わる(第8図)。第1図で示した西ノ向D遺跡例や、西桧山遺跡例を確認すると一見、口縁部に二条の貼付け隆帯が巡っているように見える。しかし、土器を詳細に観察すると、二条の沈線を深く引くことで、間に挟まれた余白部が盛り上がり、疑似的に隆帯に見えていることが分かる。また、二条の沈線のかわりに直線状の燃糸側面圧痕を二条施す

手法も、III期には見受けられる。

つまりIII期は、貼付け隆帯を含めた全ての要素が、沈線で表現されるようになった段階といえる。そしてまさに、口縁部文様の描出方法が沈線に統一化された現象こそが、複合鋸歯状文の出現理由に他ならない。鋸歯状文は、I期から刺し切り・沈刻手法によって描出されていたが、貼付け隆帯の系譜を引く横線文(縄紋原体の押捺・押圧⇒棒状・ヘラ状工具による刺し切り)とは、同一個体上で表現されることがなかった。しかしIII期には、横線文の要素が貼付け隆帯を含めて全て沈線に置き換わるようになる。これによって、鋸歯状文と横線文を同じ文様描出方法で表現することが可能になり、両者の複合へとつながったと説明できる。

I・II期までは、上川名式分布圏と花積下層式分布圏で、横線文の描出方法に地域差が認められた。一方でIII期ではその偏差が認められなくなり、

施文方法の統一化が図られた(第8図)。

つまりⅢ期は、花積下層式と上川名式の製作集団のあいだで、情報交流がより活発化した時期であり、この時期に両型式の関係が最も複雑化していたことが推測できる。

またⅢ期は、燃糸側面圧痕紋土器群の遺跡数と分布域が最も拡大する時期(註1)でもあり、そのような高度な情報網が確立する社会背景の中で、複合鋸歯状文が使われるようになったのであろう(註2)。

おわりに

本稿は、限定された時期に出現する複合鋸歯状文の成立理由について検討した。それによって、花積下層式と上川名式の製作者が、横線文の描き方を統一化させたことが、横線文と鋸歯状文の複合に繋がったということが分かった。

しかし本稿では、早期後葉から末葉に存在する入り組み状の集合文様については、十分に扱うことが出来なかった。日向前B式の「鋸歯文」(山内1983)は花積下層1式と時期が近いので、他人の空想とは思えないのだが、系統的に接続する

という確証が得られないため、本稿では保留とさせて頂きたい。今後、資料の増加によって新視点が得られた際には、詳しく論じたいと考えている。

また、今回の考察では花積下層式と上川名式を古段階から追いかけていく必要があったため、花積下層式の古段階が出土しない南関東・東海の土器群(下吉井式・木島式)を除外して話をせざるを得なかった。しかし、下吉井式・木島式は確実に花積下層式の展開に深く関わっている。本論では、横線文と鋸歯状文を語る上で必要最低限の土器に分析範囲を絞ったが、実際は古今東西の土器が混じり合っただけで前期初頭の土器群が構成されている。そのため、南関東と東海の土器を含めたさらなる分析が、これから必要になってくるだろう。

謝辞

末筆ながら、ご指導下さった黒坂禎二氏、一部の資料について写真等でご意見を伺い、ご教示いただいた谷藤保彦氏、関係文献の収集に御協力いただいた関根一郎氏に、深く御礼申し上げます。

註1 上川名式第2段階に併行する北東北の燃糸側面圧痕紋土器である「千鶴1式」について、その型式内容を整理した。その結果、千鶴1式の分布圏では、鋸歯状文の出土数が希薄であることが分かった(鈴木2019)。また、青森・北海道では、鋸歯状文の出土例はなく、北上するごとに鋸歯状文の出現頻度が低下して横線文のみが認められる。このことから、千鶴1式分布圏の土器製作者が、花積下層式分布圏の土器製作者と接触する機会は少なかったと想定できよう。岩手県域以北ではⅡ期～Ⅲ期の限られた段階でしか燃糸側面圧痕紋土器を確認することができないため、北東北の燃糸側面圧痕紋土器は上川名式の余波を受けた副次的なものといえる。

註2 ニッ木式新田野段階—上川名式第3段階の型式変化を、鋸歯状文の衰退現象から考察したところ、Ⅳ期(上川名式第3段階—ニッ木式新田野段階)になると関東地方では、頸部に燃糸側面圧痕をもつ土器の口縁部に、鋸歯状文が施されなくなることがわかった(鈴木2019)。一方で、回転縄紋や貝殻背圧痕のみを施す粗雑な土器群には、ニッ木式新田野段階まで鋸歯状文が残存する。また、上川名式第3段階では鋸歯状文自体が認められなくなり、口縁部文様は横線文に統一される。この現象を踏まえて筆者は、鋸歯状文を通した花積下層式と上川名式との関係性が、鋸歯状文の衰退を契機に大きく変容した段階がⅣ期であると結論付けた。

引用文献

※紙面の都合上、第1図と第7図で示した遺跡全てを引用文献として挙げる事が出来ないため、図版として引用した文献のみ掲示している。予めご了承頂きたい。

- 相原淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期後半から前期前葉にかけての土器編年」『考古学雑誌』76巻1号 日本考古学会
- 青山博樹 2008 「空釜B遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告』福島県文化財調査報告書第464集 福島県教育委員会
- 石岡憲雄 1975 『日立市遠下遺跡調査報告書』日立市教育委員会
- 稲田孝司 1972 「縄文式土器文様発達史・素描(上)」『考古学研究』第18巻第4号 考古学研究会
- 馬目順一 1982 『竹之内遺跡』いわき市文化財調査報告書第8集 いわき市教育委員会
- 江坂輝弥・吉田 格 1939 「横浜市神奈川区菊名町宮谷貝塚出土土器に就いて」『考古学論叢』14
- 香川慎一他 2010 「萩平遺跡(3次調査)小豆畑遺跡」『阿武隈東道路遺跡発掘調査報告3』福島県教育委員会
- 金子直行 1998 「花積下層式土器成立期の諸様相 - 蓮田市宿上貝塚の未報告資料を参考にして -」『墳墓地域文化の研究 下津弘君・塚越哲也君追悼論文集』下津弘君・塚越哲也君追悼論文集刊行委員会
- 金子直行 2017 「縄文早期末葉の刻み隆帯文羽状縄文土器の成立について - 埼玉県日高市天神峯遺跡出土土器の分析から -」『研究紀要』第31号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 金山哲哉 2004 『三引遺跡Ⅲ(下層編)』石川県埋蔵文化財センター
- 川崎純徳 1990 『那珂町の考古学』那珂町町史編纂委員会
- 久保明教 2019 『ブルーノ・ラトゥールの取説 アクターネットワーク論から存在様態探求へ』有限会社月曜社
- 毛野考古学研究所 2018 『冬木新田遺跡』茨城県猿島群五霞町教育委員会ほか
- 小池義人 1998 「関川谷内遺跡14」『新潟県埋蔵文化財調査報告書』90集 新潟県教育委員会
- 鯉淵和彦 1989 『奥谷遺跡』茨城県教育財団
- 鯉淵達司 2006 『田島遺跡(田島下地区)』茨城県教育財団
- 千葉県文化財センター 2000 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XⅢ』
- 佐藤雅一・越川欣和 2002 『下モ原Ⅲ遺跡』新潟県津南町教育委員会
- 辻谷昌彦・相原淳一・谷藤保彦・金子直行・下平博之・費田 明・小熊博史・山本正敏・佐藤典邦 1994 『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』資料集・記録集 縄文セミナーの会
- 辻谷昌彦 1982 「木島式土器の研究」『静岡考古学研究』1 静岡考古学研究会
- 辻谷昌彦 1983 「神之木台・下吉井式土器の研究 - その型式内容と編年の位置について」『小田原考古学会会報』11
- 辻谷昌彦 1984 「花積下層式土器の研究 - 側面圧痕文土器を中心として -」『丘陵』11
- 辻谷昌彦 1995 「花積下層式土器研究史と福島県内資料の型式分類」『みちのく発掘 - 菅原文也先生還暦記念論文集 -』
- 渋谷昌彦 2008 「塩屋式・木島式・中越式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 下平博之 1994 「塚田式の設定とその様相について」『塚田遺跡』長野県御代田町教育委員会
- 下村博之・費田明 1994 「長野県に於ける縄文前期初頭縄文系土器群の編年」『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の初様相』縄文セミナーの会
- 鈴鹿良一 1987 「羽白D遺跡(第1次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報X』福島県教育委員会
- 鈴鹿良一 1988 「羽白D遺跡(第2次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報XI』福島県教育委員会
- 鈴鹿良一ほか 1989 「福島県の早期後半から前期初頭の土器群について」『第4回縄文文化検討会シンポジウム 東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』

縄文文化検討会

- 鈴木宏和 2019 『縄文時代前期初頭における燃系側面圧痕紋土器の再検討 - 花積下層式と上川名式の属性比較からみる遺跡間関係 - 』『潮航』第 37 号 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会
- 鈴木宏和 2020 『縄紋回転技法からみた上川名式土器』『古代』第 146 号 早稲田大学考古学会
- 砂田佳弘 1996 『かながわ考古学財団調査報告 6: 吉岡遺跡群 1』財団法人かながわ考古学財団
- 谷藤保彦 1987 『三原田城遺跡・八崎城址・八崎塚・上青梨子古墳』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 谷藤保彦 1988 『ニッ木式土器』『群馬の考古学創立 10 周年記念論集』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 谷藤保彦 1994 『群馬県における早期末・前期初頭の土器』『第 7 回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の初様相』縄文セミナーの会
- 谷藤保彦 1999 『花積下層 1 式土器とその周辺』『縄文土器論集縄文セミナーの会 10 周年記念論集』縄文セミナーの会
- 谷藤保彦 2006 『周辺地域における塚田式土器』『長野県考古学会誌』118 長野県考古学会
- 谷藤保彦 2007 『茨城県における縄文時代前期初頭の土器様相』『考古学の深層 - 瓦吹堅先生還暦記念論文集 - 』瓦吹堅先生還暦記念論文集刊行会
- 富田 孝彦ほか 2015 『林地区遺跡群』『長野原町埋蔵文化財調査報告』第 30 集
- 土浦市遺跡調査会 1997 『田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1 三夜原東遺跡・新堀東遺跡・志杯清水西遺跡』土浦市教育委員会
- 堤 仙匡 2000 『東関東における縄文早期末葉から前期初頭の土器 - 特に茨城県北部の資料 隆帯を持つ土器を中心として - 』『史峰』第 27 号 新進考古学同人会
- 堤 仙匡 2000 『日向前 B 式期』土器の検討』『民俗と考古学の世界 - 和田文夫先生公寿記念献呈論文集 - 』和田文夫先生公寿記念論文集刊行会
- 芳賀英一 1990 『青宮西遺跡』『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅷ』福島県教育委員会
- 早瀬亮介 2017 『仙台湾周辺における前期初頭縄文土器の変遷と空間変異』『物質文化』97 物質文化研究会
- 早瀬亮介 2020 『阿武隈山地周辺における早期末葉・前期初頭縄文土器編年の再検討 - 上田郷Ⅵ遺跡出土土器とまほろん収蔵資料の放射性炭素年代測定を通して - 』『研究紀要』第 18 号 福島県文化財センター白河館
- 吹野富美夫ほか 1986 『大串貝塚』常澄村教育委員会
- 吹野富美夫 1993 『茨城における縄文時代早期終末から前期初頭土器群について - 一 下遺跡第 5 群土器の再検討 - 』『研究ノート』3 号、茨城県教育財団
- 福島雅儀 1992 『蛇石前遺跡』『三春ダム関連遺跡発掘調査報告 5』福島県文化財調査報告書第 279 集
- 堀江格ほか 2004 『摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告 12』福島市教育委員会
- 堀江格ほか 2004 『摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告 13 総括編』福島市教育委員会
- 本間 宏ほか 1989 『中ノ沢 A 遺跡』『東北横断自動車遺跡調査報告 4』福島県文化財調査報告書第 254 集 福島県教育委員会
- 本間 宏・井 憲治ほか 1999 『福島県文化財調査報告書』第 356 集 福島県教育委員会他
- 本間 宏・井 憲治ほか 2001 『福島県文化財調査報告書』第 375 集 福島県教育委員会他
- 中沢道彦 1997 『縄文時代早期末「膳棚 B 式」の設定と「ブレ塚田式」の理解に向けて』『川原田遺跡』御代田町教育委員会
- 中村五郎 1983 『東北地方南部の縄紋早期後半の土器編年試論』『福島考古』第 24 号 福島県考古学会
- 中村五郎 1986 『東北地方の古式縄紋土器の編年 - 福島県内の資料を中心に - 』『福島の研究 I 地質考古篇』

清文堂

- 中村五郎 1997 「福島県の縄文早期土器研究の諸問題」『福島考古』38
- 西井幸雄・金子直行 1989 「下段遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第87集
- 費田 明 1994 「下御堂遺跡」長野県御代田町教育委員会
- 費田 明 1999 「長野県に於ける縄文前期初頭の様相」『縄文土器論集 縄文セミナーの会10周年記念論集』
縄文セミナーの会
- 費田 明 2000 「小諸市郷土遺跡出土の縄文早期末葉土器群」『長野県埋蔵文化財センター紀要』8
長野県埋蔵文化財センター
- 費田 明ほか 2007 「駒形遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』82集
長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター
- 費田 明 2008 「塚田式・中道式」『総覧縄文土器』アムプロモーション
- 松本 茂 1993 「第3章考察」『東北横断自動車道遺跡調査報告21』福島県教育委員会
- 守矢昌文 2000 『買地遺跡』茅野市教育委員会
- 翠川泰弘 1988 『鍛冶屋遺跡』東部町教育委員会
- 山田隆博ほか 2004 『北経塚遺跡』宮城県山元町教育委員会
- 山内幹夫・松本 茂ほか 1988 「羽白C遺跡（第1次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XⅡ（福島県文化財調査報告書第194集）』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター
- 山内幹夫 1983 「阿武隈山地を中心とした縄文前期初頭土器編年について - 牡丹平2群1類土器を中心として -」
『しのぶ考古』8 しなの考古学会
- 山内幹夫ほか 2002 「本町西B遺跡・本町西C遺跡・本町西D遺跡・後作A遺跡（1次調査）」『福島県文化財調査報告書』400集 福島県文化振興事業団

図表出典

- 第1図 報告書図版をもとに筆者作成。
- 第2図 山内1983より転載。
- 第3図 鈴木2020を一部改編。
- 第4・5図 報告書図版をもとに筆者作成。
- 第6図 報告書図版をもとに筆者作成。
- 第7図 報告書図版をもとに筆者作成。
- 第8図 筆者作成。
- 第1表 鈴木2020より転載。

研究紀要 第35号

—設立40周年記念号—

2021

令和3年3月10日 印刷

令和3年3月18日 発行

発行 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

<https://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社